

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	佐賀市立思斉小学校
1 前年度 評価結果の概要	・前年度、3年目の「週末作文」は、児童の「書くこと」への抵抗が減った。数値目標よりも若干低かったものの、確実に「自分の考えを書くことができる」自信につながっている。今年度は、確かな学力を身に付けさせるために、さらに校内研修や学力向上シートと連携させて重点内容を絞り、全職員で共通理解して授業で実践を進めていきたい。 ・小中一貫教育は、中学年(5・6・7年生)の接続と、学力向上のための合同研修を充実させることができた。児童・生徒間交流として取り組んだ小中合同奉仕作業も改善を図ることができ、教育相談や特別支援教育では、合同研修、特別支援学級6年児童の中学校見学と面談、中学校教育相談担当が参加したケース会議など、連携を強化できた。今年度は、小中合同引き渡し訓練(水難訓練)を計画する。小中一貫教育の更なる推進を図り、充実した学びのほか、安心して登校できる支援・環境づくりにもつなげたい。
2 学校教育目標	『見賢思斉』の精神で たくましく未来を切り拓く児童生徒の育成
3 本年度の重点目標	① 学力向上を図る。 ② 小中連携を推進し、生徒指導・教育相談・校内研修の充実を図るとともに、さらに安心・安全な学校を目指して体制を整える。

達成度(評価)	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
	評価項目	取組内容		達成度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践 ・学習内容の定着に向けた分かりやすい授業の実践と書く力の育成	○「書くことが楽しい」「自分の考えを書くことができる」と肯定的に回答する児童85%以上を目指す。 ○授業や日常の中で「書く活動」「交流活動」を取り入れていると肯定的に回答した教員を90%以上にする。	・「書く力」を伸ばすための取組を授業や日常生活に取り入れる。(週末作文の継続、自分の考えの表出、振り返り等) ・校内研究を柱に据えて、「思考力・判断力・表現力」を高める取組を実施する。(全職員で校内研究に開く) ・児童のICT活用能力の向上やICTを効果的に活用した授業づくりを目指し、タブレットの活用を積極的に行う。	B	・「書くことが楽しいか」に対して肯定的に回答した児童は83.9%、「自分の考えを書くことができるか」に対して肯定的に回答した児童は89.5%であった。また、「友達と考えを話し合うことが楽しいか」に対して肯定的に回答した児童は93.5%で、話し合う(交流する)ことの楽しさを実感できていることが分かった。 ・週末作文を継続して行っている。(4年目) ・全職員での共通理解・共通実践に向けて研修を行ったり、校内研究に全職員で関わったりして、学びを深めている。 ・学年に応じた一人一台端末の活用した授業づくりをさらに目指していきたい。	A	・「書くことが楽しいか」に対して肯定的に回答した児童は84.1%、「自分の考えを書くことができるか」に対して肯定的に回答した児童は92.1%であった。また、「友達と考えを話し合うことが楽しいか」に対して肯定的に回答した児童は91.5%であった。 ・週末作文を継続したことで、書く力の高まりがうかがえる。 ・「授業や日常の中で『書く活動』を取り入れている」と肯定的に回答した教員は、90.9%『交流活動』を取り入れている」と肯定的に回答した教員は、86.4%であった。 ・学力・学習状況調査後の研修で共通理解したことを実践した教員は90.9%だったことから、全職員での共通理解・共通実践が図られたと見える。 ・3年以上がタブレットを家庭に持ち帰り、効果的に活用できる場を仕組むことができた。低学年においても、算数科や生活科、図画工作など、学習用端末を使う機会を意図して取り入れた。	A	・週末作文の取組は「書く力」を伸ばす取組の一助となつていと思う。この取組を継続してほしい。 ・ICTの活用の向上を図り、セキュリティ対策を含め、効果的に一人一台PCの活用を行ってほしい。	学び部 学力向上
	●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「安心して学校生活を送っている」と感じる児童を90%以上にする。	・人権集会や人権タイム、ほかほかココアの取組を実施し、自他の生命を尊重する心や他者への思いやりの心の育成を図り、学校全体に支持的態度を醸成する。 ・授業参観でふれあい道徳授業を実施したり、人権タイムにおいて学年部で検討して授業を実施したりすることで、道徳の授業の充実を図る。	A	・人権集会や平和集会、人権タイムを年間を通して計画的に、また、児童の実態に即して実施した。その都度その内容や振り返りを「人権コーナー」に掲示することで、学校全体の人権意識の高まりを図った。 ・ふれあい道徳については、全クラスいつするかの計画を立て、逐次保護者に授業を公開している。6月のファミリー参観では、佐賀県人権・同和教育資料「ジヤンちゃんケンちゃん」を使った授業を全クラスで行った。 ・児童アンケートでは、95.7%の児童が「安心して学校生活を送っている」と肯定的に回答している。	A	・「安心して学校生活を送っている」児童が95.4%と目標値を上回った。人権集会や人権タイムなどを通して、また、活動の内容や振り返りを「人権コーナー」に掲示することで、児童や職員の人権意識の高まりを図った。 ・計画に沿って、全クラスでふれあい道徳を実施することができた。「人権タイム」として、道徳の時間に学年グループやクラスで考えたり、話し合ったりする活動を設けたことは、豊かな心を育むことに役立った。 ・「ほかほかココア」を保護者と協力して取り組み、地域人材と連携しながら児童の体験的な学習を進めることができた。	A	・自他の生命を尊重する心、他者への思いやりの心の育成を願い、「安心して学校生活を送っている」と実感を持ってもらいたい。 ・「ほかほかの来」を地域の大人も書けるようになっているので、児童も「たくさんの人に見守られている」という安心感が得られていると思う。	誇り部 道徳教育 人権教育
		●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめの認知、認知に係る組織的対応ができていると回答した教員を90%以上にする。	・日常的な見取りや情報収集により、いじめの早期発見早期対応を行う。学年主任・管理職・SC・SSW等との連携を取りながら、組織的に児童の指導・保護者対応に当たる。 ・児童支援協議会を実施し、全職員による対応を協議する。 ・「月の心」「いじめアンケート」等のアンケートを毎月実施することにより、潜在的ないじめに対応する。 ・教育相談通関で全児童と担任が1対1で話す機会をつくる。その後も相談しやすい雰囲気作りをする。 ・心の結果を分析し、児童理解を図る。 ・小中合同で教育相談協議会や教育相談に関する研修を行い、児童生徒理解を図る。	A	・児童支援教育相談協議会等を通して、気になる児童や支援が必要な児童について、手立てを考えたり全職員による共通理解を図ったりすることができた。 ・「月の心」やアンケートをもとに、個別に聞き取り、即時対応を心掛けることで、いじめの早期発見・早期対応に努めることができた。担任だけでなく抱え過ぎず、学年団や管理職・SC等と連携しながら、児童の支援や保護者対応に当たることができた。 ・2学期の学校生活を安心して過ごせるように、夏休み明けすぐに教育相談通関を設け、全児童と担任が個別に話す機会を設けた。不安に寄り添ったりやる気を引き出したりとできるよう、傾聴を心掛け、その後も相談しやすい雰囲気づくりにつなげることができた。 ・1学期に、小中合同教育相談協議会を開き、中学部で不登校傾向等の気になる生徒についての情報交換会を行った。8月には、講師を招いてWebQIに関する小中合同研修会を行い、2学期以降の学級経営に生かすことができた。	A	・「いじめ防止や早期発見に努め、いじめの認知・認知に係る組織的対応を行っている」に対しては職員の96%、「日頃から児童とのコミュニケーションを重視し、児童の悩みに直ちに反応する体制をつくる」に対しては全職員が肯定的に回答した。毎月のアンケートをもとに、その日のうちに対応することを原則とし、管理職や学年内での報告・相談ややり取り、SO面談につないだりすることができた。 ・不登校傾向の児童に対してケース会議を開き、具体的な手立てを講じることで、SSWや医療機関等とも連携し、対象児童や保護者の支援に当たることができた。 ・中学部進学に際し、不登校傾向や別室登校などの手立てが必要な可能性のある児童について、来年度のスムーズな接続を目指し、小中合同教育相談担当者で情報を共有した。	A	・今後も、いじめの早期発見に努め、いじめのアンケート等をし、児童と1対1で話す機会をつくることで解決につなげていきたい。 ・チームで養育士対応し、必要であれば保護者会をすぐに開いて情報共有しているので、児童も保護者も安心している。 ・問題行動を起こさそうな、いわゆる「気になる子」について小中での情報共有を充実させる等、小中間の連携に期待したい。	誇り部 いじめ関連 教育相談
●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・委員会活動や児童会活動等の様々な場面で児童に出番・役割を与えて、承認することにより、児童の自主的・自発的活動を促す。 ・キャリアパスポートを活用し、児童一人ひとりが将来や自分の生き方についての目標をもち、成長を振り返ることができるようになる。	A	・委員会活動を中心として、学校における各種課題を児童の視点から見出し、課題解決を児童自身が話し合い、対策を講じた。 ・「先生は自分のよいところを認めてくれていると思いますか。」という問いに対し93.8%の児童が肯定的な回答をした。 ・全学年、特別活動や道徳の時間を使ってキャリアパスポートに取り組んだ。「将来これこれらについて夢や目標をもちますか」のアンケートに対して90.4%が肯定的な回答であった。	A	・「先生は自分のよいところを認めてくれる」に対して、肯定的な回答をした児童は95.4%で、目標値や前年度の数値を上回った。 ・「将来の夢や目標を持っている」の質問に肯定的な回答をした児童は89.9%であり、目標値を上回った。 ・どちらも中間評価の時より若干割合が少なくなっているが、年間を通して、支援が必要な児童を中心に扱った学級経営や、出番・役割・承認を意識した取組を行ったことにより、着実に児童の自己肯定感は高まってきていると考えられる。	A	・子供は、自分のよいところをほめてもらうこと自信になる。成長につながる。将来の自分の生き方、目標を持つことができようと思う。今後ほめる取組を継続してほしい。 ・児童はもちろん、先生も生き生きしているのだから、大人のそんな姿を見て、児童も夢や希望をもてると思う。	誇り部 キャリア教育		
●地域と誇りをもち、小・中交流や地域との連携を通してよりよい社会を築こうとする児童の育成	○「地域を活用し、思斉学に取り組んだ」と回答する教員を80%以上にする。 ○「小中一貫校であることを意識して教育活動を行った」と回答する教員を80%以上にする。	・カリキュラムマネジメントにより、地域人材の良さを生かした教育活動を、学年の目標に照らし合わせて行う。 ・小中合同ボランティア、小中合同引き渡し訓練などの行事や中期(5・6・7年)での授業参観や参入授業により、児童生徒間、教員間のコミュニケーションを密にする。 ・児童会・生徒会活動の機会を活用し、小中の課題を解決できるように小中合同でできる活動に取り組む。	A	・5年生の総合的な学習の時間の米作り学習において、田植え、稲刈りの作業を、地域の方と一緒に行った。児童は、米ができるまでの過程に携わることへ大変さ等を体感できた。 ・小中合同引き渡し訓練は初めての取組であったが、小中の打ち合わせを綿密に行い、円滑に実施できた。また、10月後半の小中合同ボランティアは、新たに地域の方(交通安全パトロール隊、町づくり協議会)にも協力していただく予定である。校区内にポスターを掲示し、地域からボランティアを募ると、昨年よりも更に積極的に外部への呼びかけを行う。	A	・「農業や和菓子店経営等様々な分野で専門的な知識・技能を有する方々、趣味でコースを楽しんでいる団体など、久保田在住の多くの方の支援で充実した教育活動を行うことができた。1月末の5年生の餅つきもPTAや地域の方が恒例行事としての位置付けに支援されている。「久保田町を誇りに感じる」と回答した児童も93.3%と昨年同様9割以上となっていることから、児童が郷土に愛着をもっていることが分かる結果となった。 ・小中連携では、活動中、児童生徒に出番・役割を意図的に与え、「承認」することを意識してきた。中学部生徒には、上級生としての自覚が顕著なものになり、小学部児童にとっては今後目指す姿が見えるものとなった。さらに、5・6年生の中期では、参入授業や中学部見学を充実させ、中学進学への支援を十分に行うことができた。	A	・地域の環境の良さや伝統行事等を通しての人材育成をお願いしたい。 ・地域の一大イベントである「思斉の郷まつり」にて児童・生徒が活躍できるような場を提供することが可能なので、次年度の取組の参考にしていきたい。	教務 小中連携		
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に良い食事をしている」児童を85%以上にする。	・「早寝早起き朝ごはん週間」を実施して、自分の生活を見直す機会をもち、基本的な生活習慣の定着を図る。 ・自分の健康を維持するために、各学年に応じた栄養指導を行い、食事の大切さを知らせる。必要に応じて、栄養職員が授業に参加する。 ・年一回給食運営委員会、各学期に献立委員会を行い、保護者へ給食への理解を図る。	A	・「健康に良い食事を心がけている」と回答した児童は95%であり、食事の大切さについて考え、普段の生活の中で実行できている児童が多い。 ・給食メニューを写真付きで児童玄関に掲示した。毎日の給食を写真で目にするだけで、給食に関心をもつ児童が増えた。 ・給食委員会が毎日残食チェックをし、1か月残食0のクラスには賞状を配布している。残さずしっかり食べようという意欲付けにより、残食が減っている。 ・給食委員会では、給食献立作成の方針や残食状況、衛生面について話し合い、意見を給食に生かすことができている。	A	・「健康に良い食事を心がけている」と回答した児童は97%であり、食事の大切さについて考え、実行している児童が前回よりも増えている。 ・中学年を対象に栄養士が授業に入り、自分の健康を維持するための栄養指導を行った。また、今年度初めて、全学年を対象に給食見学を行うことができた。 ・全国学校給食週間に合わせて、「パンズくまべう」の紙芝居や「給食がどのように作られているか」の動画を見ることで、給食に関心をもつ児童が増えた。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」週間の取組を通じて、各家庭への意識付けにもなり、「規則正しい生活習慣を身につけさせる」ことを通じて、お子さんの健康な体作りに取り組んでいる」と答えた保護者が98%であった。	A	・「規則正しい食生活を通して、食のありがたさを教えてほしい」。 ・本来、「早寝早起き朝ごはん」は家庭での教えたと考えるので、保護者に対する重要性を周知する取組(学校より活用等)を充実させたい。	育ち部 食育	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の削減	・定時退勤日を設定する。 ・業務管理システムで時間外勤務や年休取得の状況を把握し、働き方を調整する。 ・長期休業で一定期間研修や業務を入れないようにし、年休を取得しやすい計画を行う。	B	・会議で定時退勤日や時間外勤務について話し合ったが、未だに設定した定時退勤日が守れていないことがある。 ・生徒指導協議会などについて、無理がなく、効果のある方法を検討し、実践できた。 ・年休を取得しやすいよう長期休業等で研修や業務の計画を立てた。8月末で職員平均で9日間の年休取得となっている。しかし、平均年間14日以上取得にはほど遠い。	B	・授業時数の余剰時数適正化を図り、余剰数を減らして校内研究や会議時間に当てた。 ・業務管理システムの出勤打刻をすることで超過勤務を抑制する機会を得、帰宅時刻を意図する職員が増えた。しかし、その一方でまだ超過勤務を遵守できていない。職員アンケートの「在校時間の上限を意図した効果的な取組に努めているか」の項目では肯定的評価が68%と数値が低く、昨年度とほぼ同じだった。さらなる業務見直しと個人に保負軽減を進めるとともに、自分の働き方を見つめる機会が必要である。 ・冬季休業中の会議をなくするなど、年休取得がしやすいように計画を立てた。本校に1年間所属している職員の年休取得平均は12.6日にとどまっている。	B	・「年休の目標値の完全消化と定時退勤日の実施ができるように、計画に対してのチェックリストを作成し、目標達成に結びつけていきたい」を意図している。 ・先生活の安定は児童対応の安定につながると考える。難しい課題だと認識しているが、長期休業以外にも年休を取りやすい体制の構築が必要だと考える。 ・DX化が進み、業務がより効率化されることを望む。	教頭	
●特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○個に応じた支援に係る取組(共通理解、保護者対応、職員研修)ができていると回答した教員を90%以上にする。	・配慮を要する児童に、必要に応じて教育支援会議を行ったり、巡回相談や専門家チームの派遣を利用して、よりよい支援を行う。 ・学校・保護者・地域と連携してあきさつ運動を行う。 ・長期休業で一定期間研修や業務を入れないようにし、年休を取得しやすい計画を行う。	A	・配慮を要する児童について適宜支援会議を行った。また、必要に応じて保護者と面談にコーディネーターが入り、スクールカウンセラーや関係機関を紹介した。その結果、特別支援学級や通級指導教室の利用等、適切な学びの場へつなげることができた。 ・配慮を要する児童について、個別の指導計画は100%作成しており、支援に生かしている。 ・7月に特別支援の研修会を行い、9月に特別支援学級の公開授業を行って、さらに職員の理解と意識を高めることができた。	A	・「特別支援教育など個に応じた支援や取組ができている」と回答した職員は100%であった。配慮を要する児童への支援や共通理解、職員研修などに十分取り組むことができた。 ・後期も個別の指導計画を100%作成し、必要な支援を行うことができた。 ・特別支援学級における自立活動の研究授業及び研究会を行い、講師を招いて自立活動についての研修会を設けた。自立活動の取組から有効な支援について学ぶことができた。 ・配慮を要する児童について必要な場合は、関係機関を紹介して検査を行い、支援に生かすことができた。	A	・配慮を要する児童に対しての支援によく取り組んでいる。個別の指導計画作成に職員全体で意識を高めていると思う。 ・次年度も充実した研修体制を整えてほしい。	育ち部 特別支援学級	

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目										
評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
	重点取組内容	成果指標(数値目標)		達成度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○生徒指導の充実	○誰にでも「あいさつ・返事」ができる児童の育成	○「児童はあいさつ・返事ができている」と回答した教員、保護者を85%以上にする。	・小中で共通目標を掲げて、あいさつに取り組む。 ・生徒指導協議会の協議の柱として、取組を振り返る場を作る。 ・学期始めに「あいさつ」に関する生活目標を掲げて各クラスで取り組んだり、児童会が中心となって全校であいさつ運動に取り組んだりする。 ・小中合同生徒指導協議会を開き、4つの重点目標について共通理解を図り、発達段階に応じた取り組みを協議する。	A	・小中合同協議会において、あいさつについての共通理解を図った。具体的な取組は今後計画していく。 ・生徒指導協議会で、各学年グループごとに現状を確認し課題共有と、重点的指導事項を検討し、児童の実態に応じた指導に生かすことができた。 ・学校では、校長や児童、家庭からPTA会長や交通指導の保護者、地域からは民生委員など、三者が連携したあいさつ運動を実施しており、今後も継続していく。 ・全校朝会であいさつについて話をしたり代表委員会の議題として取り上げたりして、あいさつ運動の活性化を図っている。児童アンケートでは、94.7%の児童が「あいさつ・返事ができている」と肯定的に回答している。	A	・小中合同協議会において重点目標について共通理解を図った。あいさつについては、9年間のゴールの姿を明確にし、発達の段階に応じた指導を継続、徹底することを確認した。 ・生徒指導協議会において、職員間であきさつについての共通理解を、一貫した指導をしたり、全校朝会であいさつを推進するような話をする場を設けた。 ・朝のあいさつ運動では、PTA会長、地域の方など多くの方に関わっていただいたことで、児童の自発的なあいさつに繋がった。 ・児童会を中心に、あいさつをよりよくするための取組について計画し、7月～12月にかけて実施した。その結果、児童のあいさつに対する意識が高まり、自発的に気持ちの良いあいさつをする児童の姿が増えた。職員アンケートでは95%、保護者アンケートでは98%が「あいさつ・返事」に対する取組を肯定的に回答している。	A	・朝のあいさつ運動では、PTA会長・地域の方など多くの方に関わっていただいたこと、児童の自発的なあいさつに広がっており、元気な声があきさつにつながっている。 ・あいさつ・返事ができることは、基本であるから児童への継続的な指導をお願いしたい。	育ち部 生徒指導

●...県共通 ○...学校独自 ◎...志と誇りを高める教育	<p>5 総合評価・次年度への展望</p> <p>「週末作文」の取組は、「自分の考えを書くことができる」自信につながっている。それは、今年度校内研究の展開部分における「思考力・判断力・表現力」を高める取組にも、よい効果をもたらした。一方で、授業や生活場面、家庭学習における一人一台PC活用は十分とは言えない。来年度はさらに、校内研修や学力向上シートとの連携、ICT活用研修等で全職員で共通理解して授業実践を進めていきたい。</p> <p>・地域との連携において、一定の充実した教育活動はできているが、地域連携の取組の深化や人材開拓に課題がある。まちづくり協議会や学校評議員等に相談するとともに、カリキュラムマネジメントに着手し、この課題解決を図りたい。</p> <p>・今年度の取組目標であった小中合同ボランティアと小中合同引き渡し訓練を実施できた。特に小中合同ボランティアは、新たに地域と連携して行うことができ、来年度につながる活動となった。来年度はさらにこの取組を充実させたい。</p>
---------------------------------	---